解題『示現流聞書喫緊録』

2

村山　輝志*

Explanatory notes "Jigen-school Kikigaki Kitsukinroku"

Terushi MURAYAMA*

Abstract

This book was written in about 1780 by Kinoyukihide-Kubo. The text of the book explains the method of mind and skills.

The book explains that the expression "Mind and skills" is a simile taken from confucianism. Buddha and Shintoism.

The book explained the relations between the method of mind and skills and comfucianism.

This theory was expected to contribute to the understanding of people who make a special study of Budo.

キーワード　1．無念無想
2．月船君
3．太極図説

(一)，はじめに

本解題を書く目的は，『示現流聞書喫緊録上中下巻[1)]』（以下『喫緊録』）に所収されている「示現流」（以下「当流」）の本体の解釈と語釈をすることである．ちなみに当流の本体について，『喫緊録』では次のように述べている．

「心とは，自分も自覚できない無心の味である．無心の味なのでどのような変化にも即応できないことはない．心は正しく明らかで光り照らすものなので敵の隙を照らし，見抜かないことはないのである．……普通の人では，当流の本体である心を悟るのはむずかしい．しかし心というのは，本体であっても元来無形で手にとることができないからである．そこで，この本体を会得するには，……技に習熟し，敵と対した時はこの技を忘れて胸中には一物もない空の心境で打つべきである[1)]」とあり，心と本体は同意語になっている．このような本体を説明するのに汀江放船，三才，二橋，二字の四つの譬喩の語句を用いている．

本体は，儒学の「四書五経」のなかの一書である『大学・中庸[2)]』の『大学』の経文や『中庸』の「天命」の章と道理を同じくする[1)]と『喫緊録』で述べているのである．

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

本解題で述べようとするのは，当流の本体と上記の経文や「天命」の章と「道理」を同じくするのであれば，本体と「天命」の章などと比較すれば，自ら当流の本体が理解できると思われる．

方法としては，当流の本体の内容を検討し，『中庸』の「天命」の章の解説と照合する．照合することにより，当流の本体の一部が儒教により発想したことが理解できるものと思われる．

儒教といえば，孔子を祖とする一つの体系的教説であり，主に実践を重視する．儒学といえば，この教説とこれにともなっている多くの資料，文献を研究することをいう．

内容は，孔子にはじまる政治，道徳の学である．後漢に五経などの経典が研究され，六朝・隋・唐代に経典の解釈学が発展した．そのうちに老荘や仏教などの発展もあったが，宋代に入ると新儒学ともいわれる「道学・性理の学」が起こり，やがて日本の社会一般に及んだのは江戸時代以降である．

二つ目は，『喫緊録』に所収されている儒教，荘子，老子その他などの語の解釈をみることにより，当流の本体の助けになるので他書から転載した．更に諸書に所収されている，「天命の章」とかかわる語句を引用し，次の項目を設けた．「理気」「本体の代表」「まとめ」そして「語釈」である．これらの項目の間には意味・内容が重複することもあるが，当流の本体を理解する助けになると思われる．

(二)，当流の本体と「天命の章」について．

(1)　当流の本体と「天命の章」

当流の本体というのは，汀江放船，三才，二橋，二字のことである．これを四序ともいう．四序を代表しているのが汀江放船である．

当流の本体（四序）とは，一口に言って無念無想の境地について汀江放船を中心にした四序の譬喩の語句を使用して述べたものである．（後述）

上記の当流の本体と道理を同じくするというのは，四書五経にある『大学・中庸[2]』に所収されている『大学』の経文や同『中庸』の「天命の章」と道理を同じくする[1]．このことが当流では次のように述べられている．「……汀江放船というのは，当流にある四序の第一である．序というのは当流の本体をすべて，ここに備えさせ，欠けることなく味を含ませるものである．この句に三才，二橋，二字を通じさせる．これは『大学』の経文，『中庸』の天命の章と道理を同じくするものである．……[1]」とある．「天命の章」について概略述べれば，真理とは，天地自然に即したものであり，太極，陰陽，五行という語句を用いて構成されている．太極というのは，道であり，理である．これは形而上の道であり，天地が万物を生ずる根拠としての原理である．陰陽というのは，陰と陽の二つの気により万物を形成するものであり，五行というのは，人間の生活に欠かせない基本材とし，木火土金水の五つをあげている．これは，形而下の器であって万物が生じてくる場合の材料となるものであるとした．この理と気が世界を構成しているというのである．そしてこの理が大自然がもっている四つの基本的な性質といわれる「元亨利貞」（天の四徳）といわれるものである．いわば理（太極）の内容になると考えられている[11]．このような理が天が賦与した本然の性である仁義礼智と同じものであり，これが無念無想と同意語であるとするものである．

(2)　当流の本体

本体については，『喫緊録』の全巻を通じて述べられているが，就中，上巻に述べられている．本体について大概を述べる．

① 汀江放船　月船君
　　身船我

汀江放船とは，人生一代の言行所作を述べたものである．この語に含ませている「月船君」の境地を悟り，「身船我」を戒めとしているものである．

汀江放船は，人間が渡世する時の心構えについて譬喩した語である．人が渡世するということは，大海に船を放したのと同じである．海上での船では，人々は毎日変化する海の潮流や波風を考えて，うまく漕がなければ船は覆るのである．人の生きかたも同じで，やるべき仕事を大切にし，やり遂

げる．そうすれば一家が繁栄する．以上はわが身を船にたとえたものであるので「身船我」という．

「月船君」というのは，月を船にたとえているので月船という．たとえば月は東から西に入る，その間の距離の遠さは，言い尽せない．しかし月はたった12時間で東から西へ回るのである．このように途方もない距離であるが速くみえない，同じ場所にあるようにみえる．ところが忘れているうちに月は東から西に入るのである．人々は天地のめぐみで一生を過しているのに，日月の動きが目にみえないのと同じように，ただ自分の才覚のみで生きていると思い，天地の恩を忘れがちになる．

「月船君」の君は，天地の才覚というのは，非常に尊いとして，外文では君としたのである．つまり，「汀江放船」「月船君」「身船我」というのは，人々が渡世するに当り，天地の恩を忘れずに，しかも自分がやるべき仕事をし，油断すべきでないことを説いたものである．

天地の恩とは，人々は天地に次いで生まれたものであり，天地の才覚をうけていることである．その才覚とは，人間の本然の性である仁義礼智であり，人が渡世するには，この本然の性を発揮して渡世することを説いたものである．

口伝としての月船君

人々が生きる道を説いた「月船君」「身船我」には，当流の奥義を潜ませている．月船の船を胎児の場合にたとえた胎児は，月々成長し，十ケ月近くの月をとり誕生するので月船といい，十ケ月の間の胎児は，無念無想であるので非常に尊い．それで「君」と名づけたものである．胎児は無念無想の本体であり，意識のない心を云っているのである．

「身船我」というのは，船にたとえてある胎児が誕生すると人の身となり，意識の工（たくみ）があることをいう．人は母の胎内にある時は，無念無想であっても誕生すれば自然と自分の身を保つために知覚（眼耳鼻などの感覚器官）が生じて欲心が出，無念無想でいられなくなるというのである．それで当流では，流儀の本体を月船君に表わし，無念無想の本源とするのである．そして身船我というのを戒めてこれを除くことを考える．欲心は我が身のために求めるもので，本心（仁義礼智）から出るのでなく，知覚から起こるので意識と名づけてこれを卑しむのである．

② 三才

三才の三とは，天と地と人のことをいう．才とは，天地は万物を生ずることができるので才があるという．これは工（意識）がなく天地開闢以来，変らず物のすべてを成就する．

人は天地の道理に従うことから，一身の本性（仁義礼智）を成就した．これがあるので天地と同じ才を持っているという．当流で三才を流儀の本体として設けるのは，人の才と天地の才とを一体とした境地にするためである．

③ 二橋

二橋とは，天の橋を渡るときは意識をもって渡らず，地の橋を渡る時は意識を離れて渡ることができる．二つの橋によって意識を除くことを示す．

④ 二字

二字とは忠義と孝行の忠と孝のことである．忠孝を尽すときに意識の工がないことを説いているのである．

以上が当流の本体の概略である．いずれも汀江放船，月船君を根本に他の三つの観点から更に説いているのである．これは月船君という無念無想の本体が，三才，二橋，二字をすべて包み込んでおり，貫通しているのである．もちろん三才，二橋，二字も無念無想を述べていることには変わりないが，それらには無念無想を代表する資格はなく，本当の代表は月船君である[3]．

(3) 天命の章について

天命の章は『中庸』の第一段第一節と第二節のことである．第一節は「天命」で第二節は「喜怒哀楽の未だ発せざる之を中と謂う」である．当流の本体は，（赤塚忠『大学・中庸[2]』）に所収されている「天命の章」と道理を同じくするものであ

るというので，同章の通釈を下記に引用する．天命の章は『中庸』の第一段第一節と第二節のことである．第一節は「天命」で第二節は「喜怒哀楽の未だ発せざる之を中と謂う」である．

① 天命

「天が（人間に人間として生きるべき根本のものとして）命じ与えたもの，これを性というのである．その性にしたがい行なっていくところに成り立つもの，これを道というのである．（また）この道を（他から強制によらずに自律的に）修得すること，これを教えというのである．（以下略）

上記にある天命とは，天帝の命令し与えたもので天命の性である仁義礼智のことである．道とは，主として修己安人（論語）を目的とし，上記の本然の性を内容とするものである．人の守り行なう道，人道の意である．道という概念は，もと神霊が人間界に下る道路の意から発生して，人間の依拠する法則，物ごとの必然的に展開する原理などの意となったと考えられる[2)]」

② 喜怒哀楽未発の中

「（さて人の行ないは，物ごとにふれて感情の動きとなることからはじまるが，（その感情が）喜怒哀楽などとなって外に表われる前（に心の平正さがあるべきである）それを中という．この中が表われると（その行ないは）すべて物ごとの節度に合致することになる．これを和という．（だから）中こそは，天下（が秩序正しく治まるため）の大根本である．和こそは天下（に）あまねく（実現すべき）道である．（このようにして）中と和とを実現しつくせば（人間世界ばかりでなく）全宇宙の秩序がいささかのくるいもなくなり，ありとあらゆるものが生長をとげて（全宇宙が繁栄するのである）．[2)]」

未発とは「外に発現しようとしてまだ発現しない状態をさす．朱子は「喜怒哀楽は情なり，その未発は則ち性なりと解している．」中とは「中正，道の実現が物ごとの常に中正適切さを得る一定の状態をいう[2)]．」中節の「中」は合致適合の意．「節」は物ごとに自然に備わっている節度．

上記の「天命の章」をより分り易く説いているのが（佐藤仁著『朱子』集英社[11)]）の次の文である．

「喜怒哀楽といった感情がまだ発動していない時は，性というよりほかはない．その性の内容として朱子が考えているものは，仁義礼智の四つである．この仁義礼智というのは『中庸』にいわゆる「天命の性」であって，これは万人に共通する人間の本性である．朱子は，これを本然の性と呼ぶ（中略）その性が純粋自然なかたちであらわれてきたものが『孟子』にいわゆる惻隠，羞悪，辞譲，是非の四つの情である．（中略）人間の心のなかに仁という性がそなわっている．それが情となってあらわれてきた場合が惻隠である．以下義が羞悪，礼が辞譲，智が是非ということになる．

しかし人間は，この性だけを受け取ってこの世に生まれたわけではない．同時に身体も与えられている．つまり本性は，この身体のなかに宿っているわけである．ところがこの身体のほうは，十人十色で個人差がある．したがって現実の人間がもっている性質や能力は，人によって千差万別である．朱子は，これを気質の性と呼び，これには善悪があるとする．そういうわけで本性がいつも理想的なかたちであらわれてくるとは限らないのであって，多くの場合，本性のほうが身体的なもの，つまり気質に負けてその作用としての情のあらわれかたに過不足が生じてくる．そしてそれが動機となって，その人の行為に過失が生じてくる．そこでこの気質がもっている欠陥を克服して，本性を養ない育てていくことが必要となる．また感情のはたらきに過不及が生じないように調節することも必要となるし，さらにはその結果としての行為に不正が生ずればそれを正すことも必要となる．その役割をになっているのがじつは心なのである．

心は一身の主宰として，われわれ人間のいっさいの営為が王道にはずれないように取り仕切っているもので，われわれの身体のなかの王様のような存在である．しかし心という名前の王様は，実に困った王様なのである．少しでも目を離すと，すぐどこかへ行ってしまって行方不明になる．こんなことでは一身の主宰としての王位は保てない．悪くすれば本来は，その臣下であるはずの感覚的なはたらきに王位を奪われて欲望の奴隷になりさがってしまう．

心が一身の主宰としての役割を果すためには敬のくふうが必要である．恭敬という熟語がある．恭が顔つきや動作のうえのつつしみであるのに対して，敬は心のつつしみのことである．心をつねにひきしめて，散漫にならぬように，だらけないようにすることである．いうなれば一種の精神統一であり，精神を何かに集中させることである．有名な敬の定義に「主一無適」がある．心を一つのことに集中してよそみをしないことである．

(三) 「天命の章」と関連する当流の語句．

(1) 「この神霊というのは，儒者が常にいっている理気である．尊んで天帝と称する誠の本体である．[1)]」

(2) 「天地精粋の気に理を載せて生まれた人は，天がし

からしめた道理で天が人に天を継がせ，人道を極めさせ，天文易道を開かせ，天地の道を人の道に明らかにし，きわまりなく流行させたものである.[1)]」

(3) 「天地の神の誠をそのままうけて，それを性とし，天地霊明の気を合わせて心とするのが人である．本当に人は，天地の才と並び立つ大徳をもっている.[1)]」

(4) 「天地人の三才の神霊は，正しく明らかでその光に向ってくるものはない.[1)]」

(5) 「仏道が本来の面目として説いているのは，儒教で喜怒哀楽がいまだ未発である.[1)]」

(6) 「誠というのは，天地に工がなく万物を生育する時の心であり，それは空である.[1)]」

(7) 「意識から起こる熱火を相火というのである．どんな凡人でも理非を区別する心がある．この心は，天から授かったもので，これを心火というのである.[1)]」

(8) 「四序は，それぞれ人には動じない本心があることを示している.[1)]」

(9) 「当流で汀江放船，三才，二橋，二字，心不去不来，三世不可得，鉢羅奢法などを説くのは，当流の本体である．本体というのは心である．心というのは空である．一物があればそれは心とは云わない.[1)]」

(10) 「当流は心の技である．心は意識がなく無形である．そこで，この心を指して味という．味は言葉で説明できない．修行を積んで味を悟れば，技は雲耀に達する.[1)]」

(11) 「粗暴の資質をもった人は，敬慎を好まないので月船，餓鬼界の教えで導き，敬慎の資質の人は，かりそめにも実践を捨てないので，更によりよく三才，二字の教えで導くべきである.[1)]」

(12) 「当流を会得するということは，意識を取り去って心が一身の主人公であるということを明らかに知ることである．意識がなければ，心が曇ることはない.[1)]」

(13) 「礼儀の方式を守り，喜怒哀楽未発の心を求め，誠を尽すのが当流にとって工のない意地を守ることである.[1)]」

以上のことを概略述べると，天命とは，天帝の命令し与えるもので，人がこれをうけたのが道徳である．人が天から授かり，受けとったものであり，人の使命ともいうべきものであるので，これを自覚して実践すべきであると説いたものである．(なお，天帝とは理気，神霊，太極，誠の本体ともいう.)

たとえば,「天からその本性が賦与されている.」「人は天がしからしめた道理で天が人に天を継がせ，人道を極めさせ，天文易道を開かせ，天地の道を人の道に明らかにし…….」「天地の神の誠をそのままうけて，それを性とし，天地霊明の気を合わせて心とするのが人である.」などがそれである.

(四)，理気について

今まで述べてきたのは，理気についてである．これをさらに理解し深めるために諸書の解釈を引用する．まず当流の理気については，次のように述べられている.

(1) 「天地人の三才とは，智徳の用であるので働きである．智徳が外に出て目にみることができるのをいう．たとえば天地にある日月星は昼夜24時，流転循環して万物を照らし育てるので才があるという．これは天地の間を主宰しいつづけた神霊が万物を形成したのであり，儒者がいう理気のことである．誠の本体である．本体は，まだ動かず無極にして太極という．動きはじめて陰と陽に分かれ，陽となって清いものは登って天となり，日月星辰は，天にかかってとどまらないものである．陰となって濁るものは下り，これが地となる．清濁中和して中間に気化すると，人や物となり，天をいただき，地を踏んで気化し生き生きとして繁茂する．万物は元来一理気の働きで生成するのである.[1)]」

(2) 周敦頤(しゅうとんい) (1117-1173) は『太極図説』を著わした．「かれは，この世のさまざまなすべての物ごとは，「無極にして太極」という唯一絶対の根元から，陰陽という相反・相乗・相循環する作用が起こり，その作用によってそれぞれ五行の質的別を生じて展開するとし，その物のうちでは人間が最もすぐれていて，その間には中正仁義の法則が備わっている」と説いた[2)].

(3) 「太極は『易経』で太極を陰陽に先行する存在[4)].」

(4)　「太極は陰陽の気に分かれる以前の根元の気を意味したが，朱子は太極を天地万物の理と解して理を絶対化した[5]．」

(5)　「朱子は，理に存在論的意味と法則的意味という二つの性格を与え，それは気のなかにつねに存在するものとみた．気が形質をもち，運動するのに対して，理は形質もなく，運動もせず，その実在は気を通じて観念的に把握されるべきものとした．つまり気が形質をもとうとするとき，運動を起こそうとするとき，理がそこに存在しなければ，気のかかる作用は全く不可能であり，気の存在そのものも不可能にならざるを得ない．ただ朱子はこれを倫理にもってきたとき，理気に軽重をおきながらも，気を悪とのみ断定せず，気の清濁による結果として，そこに善悪を認めようとした[4]．

(6)　「理気のうちの気とは万物を形成する材料およびその運動をいい，陰陽の気と五行の質とをそのなかに含む．理とは，その気のなかに内在する原理をさす．『易経』に（一陰一陽を道という）の句がある．伊川は，この「道」をただちに陰陽に結合させず，「陰陽する原因になるものが道である」と説いた．この道とは，理である[4]．

(7)　「気とは，万物を形成する材料およびその運動をいい，陰陽の気と五行の質とをそのなかに包む．理とは，その気のなかに内在する原理をさす[4]．」

(五)，汀江放船と仁は，本体の代表．

当流の本体は，汀江放船，三才，二橋，二字である．これを四序（序は本体）ともいう．四序を代表しているのが汀江放船である．代表とは，汀江放船をあげれば，汀江放船，三才，二橋，二字の四序は，すべてそのなかに含まれている．もちろん汀江放船以外の三才，二橋，二字も本体であることにはかわりない．しかしそれらには，当流の本体を代表する資格はない．本体を代表しているのは汀江放船である．当流では，本体を代表しているとして次のように述べている．

「汀江放船というのは，当流にある四序の第一である．当流の意地をこれに含ませ，当流の意地の本体をすべてここに備えさせ，味を含ませるのである．この句に三才，二橋，二字を通じさせる．汀江放船の意地を立てなければ三才，二橋，二字は成り立たない．三才，二橋，二字は汀江放船の意地を細密に説いている[1]．」

「当流は，初学，学士から賢，聖，君子，名士であっても汀江放船の意地を離れず，上下に徹する意地である[1]．」

当流の本体を代表しているのが，汀江放船であることは上記した．この発想は，儒教でいう，本然の性である，仁義礼智の仁が他の四徳を代表していることからである．以下にいくつかの書から，それを引用してそれを証明するものである．

「宋学では，仁を天道の発想とみなし，一切の諸徳を統べる主徳とした[6]」

「仁の徳は，義礼智信その他，諸々の徳目の基本として，それらの諸徳の活動の根本的な存在と考えられている[7]．」

「仁は孔子の中心思想．孔子は「克己復礼」と説明した．おのれのわがままをおさえて，礼すなわち社会の正しい規則に従うことを仁といったのである．克己とはつまり忍であり，おのれに忍であれば，人には不忍すなわち同情心がおきる．伊川は，仁を理と説き，言の仁と偏言の仁との両者をたて，仁義礼智と併称するときには，後者に属さしめ，この四徳を総合したものを前者にあてている．のちに朱子は伊川の説をつぎ，「心の徳であり，愛の理である」と定義をくだしている．仁をただちに愛としないのは，愛を情（作用）とみ，仁を性（本体）とみているからである[4]．」

(六)，まとめ

人間というのは，万物を造営する根元，原理である形而上の理を本質としている．（天帝は天地の間のことを主宰し，いつづけた神霊である．この神霊というのは，儒者が常にいっている理気である[2]）理と同意語である性，すなわち仁義礼智なしには，人間の存在はあり得ないのである．そして性なしには，人間の問題を考えることはできないのである．（そもそも人は，天地に次いで生じたものなので，天地の道理に従うことから，一身の本性を成就するものである．本性というのは，即ち仁義礼智信である[1]．）

しかし，その反面，太極，道，性は同じといえども，人が後天的に稟け得た気質の性，すなわちうまれつきは異なる．（中庸第一章，章句）．「性道理雖レ同，而気稟或異，故不レ能レ無二過不及一之

差.」とあるように人間の現実の態度をみすえて，うまれつきの性（気質の性）というものは，人によって異なることを述べていることである.（人に聖愚の違いがあっても性は一つである1).）具体的に述べると，朱子の考えでは，すべての物，つまり万物は「理」を根元にして成り立ち，展開しているので「理」が万物のなかに包蔵されているものの，実際には，個別差のある個々のものである．そして各々の作用や関連が，たとえば人間にあっては賢愚となり，過不及を生じるとするのである.（人の気質が純粋に生まれた人は，心が明らかであれば情欲のために覆われることが無い．これが心が形に勝つことになるので才があるといえる[1].）

朱子は，そのために形而上（形式を離れたもの，抽象的なもの，無形）と形而下（形をそなえるもの，有形）を区別したのである．つまり，形而上を理として，形而下を気稟としたのである．この区別は，気稟（うまれつき）によって渡世している人間にとっては，性（本然の性）に復ることを常に要求し，それがためには，学問教育が絶対に必要であることを明らかにしたことである．すなわち，形而下の人間は，本然の性に復ることが，真実の生きかたであるというのである．したがって，それに必要な学問教育は，天理の純粋至善を人間が，道理上からそうあるべきものにする．すなわち理性以外の外的権威や自然的欲望には，拘束されず，自ら普遍的道徳法を立てて，これに従うことが課題であることを明らかにしたのである．具体的に述べれば，自ら反省し，道徳心をめざめさせて発揚することである[2].

（人の身は，同じでも純粋でない気をうけて生れた人は，その心が正明でないので欲心が生ずる．しかし欲心を除去し，正明にすることはできる．しかしこの道理を知っていても，心が拙なく，情欲に随えば，情欲が盛んに働いて本性がまがる．心が形に役すれば，すなわち不才というのはこれである[1].

当流の心法は，形である意識を除去し，本然の性のみになることが，無念無想であり，無念無想になった瞬間，かねて修行した技法で相手を打つことを説いているのである．無念無想の本体が，汀江放船，三才，二橋，二字である．この四つの譬喩の語句で説明しているものである．

(七)，語　釈

1　禹（う）

「昔中国で禹が江を渡るのに竜に乗った[1].」

「古代聖王の堯，舜，禹，湯（とう），文（ぶん），武（ぶ）の一人．帝舜の時，賢臣として舜の創業を助けた．特に治水事業を完成した．徳によって舜から帝位を譲られ王を称するが禹王以後，王位は子孫に継承された．神話の世界における禹は水神であって，これを祖神として伝承する種族がやがて王朝創業の祖として人格化したものであろう[5].」

2　文之和尚

「大龍寺の住僧・文之和尚博識なり[1]」

「文之玄昌，軒を雲興と号し，斎（居室）を時習と名づく．号は南浦，別に懶雲，狂雲の号がある．日向の人．臨済宗．弘治元年（1555）飫肥南郷の外浦に生まれたので南浦と号した．薩摩藩主の島津義久は彼の儒学の才を聞き，礼を厚くして招き，大隅の正興，安国の西寺に住せしめたのち顧門となって大いに公を補佐した．

慶長16（1611）年57才，島津義久は鹿児島に大龍寺を創建したので彼を以って開山となした．元和6（1620）年没，66才．

著書に『南浦文集』三巻．『砭愚論』『聖蹟図和学鈔』『決勝記』『鉄砲記』『日州平治記』などがある．

島津三公（義久，義弘，家久）が儒を崇重するは文之の儒的教化による所極めて多大といえる[8].」

3　堂に入る

「段階を得て堂に登り，室に入ることは，その人の器量に拠るものである[1].」

「子路はもと遊侠の徒である．孔子のもとに暴れこんだ．だが子路は，温容を乱さぬ孔子の風格に圧倒され，一転してその門下となった．孔門の塾頭格の存在になったが，学問は苦手であった．

孔子は，音楽は人間の品格を陶冶すると考えて，教育していたが，子路の演奏は進歩しなかったので弟子達は子路を軽視した．すると孔子は彼らに云ったものだ．

「由（ゆう）（子路）や堂に升（のぼ）れり，いまだ室に入らざるな

り」（子路の腕は相当なものなのだ．表座敷では十分通用する．奥の間ではまだ無理だといっただけだよ．）これにもとづいて，学問や技芸がひとかどの領域に達していることを，「堂に入る」と表現するようになった．「論語」先進「史記」仲尼弟子列伝[9]」

4　「千里の行は足下より始まる」

「初学の燕飛の初手打ちに千里立行は一歩の初めとして，意地を示すのも，すなわち汀江放船の味である[1]．

「合抱の木は毫末より生じ，九層の台は累土より起る」（ひと抱えもある大木も針先ほどの芽から生え，九階建ての高殿も基礎固めから着工する）といわれるように，千里の長旅も，踏み出しはただの一歩である．ものごとはつねに最初がかんじんだ．凡人が，完成間近にこぎつけながらいつもそこで失敗するのは，出発点の慎重さを忘れてしまうのでその原因である．」。「老子」第64章[9]

5　正蒙

「当流の伝書に載せている心というのは，先儒，張子の『正蒙』の書にいう，虚と気を合わして性の名がある…[1]」

『正蒙』書名十巻　張載撰．「この書は張載の学術を窺うべき第一の書で，蒙は蒙昧（霧などが立ちこめて昧いこと．知識が開けず，物事の道理に昧いこと）未明（夜がまだすっかり明けきらない時）の意．太和，参両，矢道……など17編に分つ．その説は，宇宙を以て一太虚から生ずとし，又人生を以て天地・気質とし，君子は天地の性に復るべきことを説く．」。

『喫緊録』にある文章は『正蒙』の太和篇第一にあるものである[10]．」。

6　先儒[1]

「儒学の理想は，己れを修め，人を治めるところにあるといわれている．それを具現した最高の人格がつまり聖人であった．朱子は儒学者であり，とくに宋学を集大成した人物といわれている．宋学というのは，広義には，中国の宋の時代の学術思想を総称することばである．

宋学は，仏教や老荘が抱えていた最大の弱点である人間生存の基盤である父子，君臣，夫婦，兄弟，朋友のいわゆる五倫の道をないがしろにしているという欠点を鋭く批判しながら，仏教や老荘理論を超克しうるような世界と人生の本質に関する精密な理論を新たに構築した儒学思想なのである．

その代表的な学者が，周惇頤（1017-1073），張載（1020-1077），程顥（1032-1085），程頤（1033-1107），邵雍（1011-1077）のいわゆる北宋の五先生と朱子（1130-1200）である．

朱子が宋学の大成者になり得たのは，朱子がこの六人のなかで一番後輩であり，「時の利」を得たことと朱子自身の才学によるものである．前五人を先儒というのである．先儒の中の一人張載が『正蒙』の書を撰したのである[11]．」

7　張載（字は子厚）号は横渠（1020-1077）

「長安（陝西省）の人，後に郿県の横渠鎮に住んだので世人から横渠先生といわれた．

横渠は，太虚の世界を考えた．太虚は無限の拡がりがあり，そこには気が充満している．但し，太虚と気とは別のものでなく，太虚そのものが気である．

気の凝集によって物が生まれ，物の気が散ることによって，その物は消滅する．しかし物の形骸が消滅しても，気の消滅はありえず，気は太虚に戻る．そして太虚のうちの気が再び凝集して物をつくる．このような動きが絶えず，繰り返されるので一種循環的である．

気が凝集するとは，陰陽二気の感応合一である．気の合わさり方の違いによって人・物の差ができるのである．陰陽二気の感応合一のしかたにいろいろあることになる．

心性説については，性を天から与えられ，それは善なるものである．天は悪なる性格がなく，至善なる存在としてのみ考えられる．ところが現実の人間には悪がある．その原因は，気の偏りにあるとする．人の形骸を構成するものは，気であり，性は内在するが故にその発露に当たって気の影響を受ける．性が気の影響をうけた場合，これを「気質の性」といい，気の偏正によって善悪が生じる．気質の性に対し，気の影響をうけない本来のものを「天地の性」という．天地の性とは善悪を越えたもので，その性格は至善というべきである．人が理想とするのは天地の性の維持であって，そのために気質を変えて善い状態にする努力が主張されるのである[12]．」

8　包丁

「當流之聖ハ，包丁カ全手無トイヒシ如ク，敵之容ヲ見，手足之音息合ヲ聞トキハ，某敵末前の形ヲ自然ニ知ル也[1]．」

「料理用の刃物を指すようになったのは，後世の日本でのこと，「庖丁」の二字は春秋時代の名料理人の名である．

庖丁は魏に仕える料理人．（本来は庖丁の二字が料理人という意味）あるとき，かれは恵王の前で牛を割いて見せた．手にした刀が牛の体にふれるや，スルスルと肉が骨から離れていく．その刀さばきは，舞楽を

舞うかと見まごうばかりのみごとさであった．「たいした技術だ」と恵王がほめると，庖丁は，「いや，わたくしがお見せしたのは，技術ではありません．この仕事をはじめたばかりのころは，牛全体の姿が気になりました．三年ほどたつと，ようやく体や筋が見えるようになりました．そしていまでは，わたくしは目にたよらずに牛を割くことができます．牛に向かうと感覚の働きは止み，心が動きだします．あとは自然の摂理にしたがうだけです．牛の体に自然にそなわっている隙間を切りひらいていくのです．これは，技術を越えた"道"の境地というべきでしょう」

これをきいた恵王は，人知を働かせず，自然に身をゆだねることが，生をまっとうする道であることを悟ったという．「荘子」養生主[9]

9　尭・舜

「重方の言葉は，聖賢の性が善であることは，尭・舜と同じ[1]．」

「たとえ，尭・舜のような知徳があっても，物の道理を決断する義の心が無ければ……[1]」

「儒教では，尭舜の気象，仏教では釈迦如来の気象と同じように……極致を得ることができるのである[1]．

昔の聖天子また前代の聖王．仁徳をもって王位についた尭・舜・禹・湯（とう）・文・武，それに王位にはつかなかったが周公（しゅうこう）を加えた聖人たちで，孔子をはじめ儒家が理想とした聖王をいう[5]．

尭の仁は，広大で，知は英知にあふれ，はじめて暦をつくり，善政を施す．晩年，有徳の舜に天下の政治を代行させた．このように有徳者から有徳者へ平和の中に政権が譲られるのを禅譲といい，儒教社会の理想政治の姿とされた[5]．

舜は，尭が崩じて即位した後，禹（う）・契（せつ）などを登用し，諸官を定め，天文律暦・農業土木，礼楽（れいがく），刑政など施政の根本を明らかにした．いわば農神である[5]．」

10　皇極経世書（こうきょくけいせいしょ）

「天地一休，12万9千600年と『皇極経世書』でも邵康節先生がこれを定めた[5]．」

「北宋の哲学者．邵雍（しょうよう，康節）の主著．康節と同時代の程伊川（ていいせん）の「理」の哲学，張横渠（ちょうおうきょ）の「気」の哲学に対し，「易」に基づいた「数」の哲学を唱道し，南宋の朱熹にも大きな影響を与えた．『皇極経世書』はその「数学」を歴史哲学，音韻学，宇宙論として展開したもので，その元会運世説がもっとも有名である．すなわち彼によれば，宇宙の時間は元，会，運，世の4つに区別される．1元に12会，1会は30運，1運は12世，1世は30年に相当し，1元（12万9600年）にいたると天地は崩壊し，また新たな世界がはじまるという[5]．」（三浦国雄 p110）

11　伏義と通鑑

「『通鑑』の前篇にいうには，伏義が甲歴をつくり，歳時を定めた[1]．」

「伏義（ふくぎ）とは，神話伝説上の一人．八卦（はっか）を画し，書契をつくり，民に佃漁牧畜を教え，木を穿って火を起こし，火食をひろめるなど，文化伝説としての伝説が多い．（鉄井慶紀 p361）

資治通鑑（しじつがん）　北宋の司馬光が著わした歴史書．戦国時代から五代までの編年体の政治史．全294巻．途中から国家の全面的援助を受けたり，学者の協力を得て，19年の歳月を費して元豊7年（1084）に完成．『資治通鑑』の視点と内容は，「治を資（たす）ける通鑑（通史）」という題名の示す通り，皇帝の統治のための歴史事例集であるが，その主眼はあるべき君臣関係に置かれており，したがって士大夫も読者として期待されていた[5]．」

12　明鏡止水

「およそ，心は明鏡止水のように静かで，明らかなものである[1]．」

「流れる水は鏡にならないが，静止した水はいっさいの姿をうつしだすことができる．この鏡と同様，いっさいの事物に取捨選択をくわえず，すべてを虚心に受け入れる，そうした不動の境地を形容したもの．

『荘子』徳充符（とくじゅうふ）篇に見える．

一人，流水に鑑（かんが）みるなくして，止水に鑑みる．という句が出典である．

『荘子』に登場する魯の王駘（おうたい）という不具者は人望があり，多くの弟子がいた．彼は講義をするでもないし，指導するでもないのに，彼の門をたたいた人間は，かならず心に得るところがあるという不思議な人物であった．

孔子の弟子が不審に思ってたずねたところ，孔子がいうには，「流れる水は鏡にならぬ．だが静止した水は，いっさいの姿をうつしだすことができる．王駘はいわば静止した水のような人物なのだ．……かれがなにものにもたじろがぬ不動の境地を得ていることはいうまでもあるまい．」同じ徳充符篇には，一鑑明らかなれば塵垢（じんこう）止まらず，止まれば明らかならざるなり．久しく賢者と処（お）れば，過（あやま）ちなし．というのもみえる．明鏡はほこりを寄せつけない．ほこりがつくのは錆た証拠なのだ．賢者と暮らせば過ちは犯さぬ，という意

味である．「荘子」徳充符[9]，『和田武司，市川宏，中国の故事名言，p291』

13 「尺蠖(せきわく)の屈するは，もって信びんことを求むるなり[1]．」

「尺取虫が身を縮めるのはつぎに伸びるためだ，竜が雌伏するのは雄飛にそなえるためだ，同様に人間が沈潜して真理を探求するのは，やがて活用すべく力を蓄えるためである．という『易経』繫辞伝のことば．

易の原理は，陰と陽とが互いに転化し，消長交替することによって循環し，不断に変化することを基本としている．太陽が沈めば月が昇り，冬が去れば夏が来る．去るとは消滅することではなく，屈すること，身を縮めて力を蓄えることであり，来るとは信（伸）びること，身を伸ばして力を発揮することである．「君子は器（才能）を身に蔵し，時を待ちて動く」（繫辞伝）といわれるように，「屈」「消」を単に消極的否定的なものと見ず，そのなかに積極的なものに転化する契機を見出すことが必要だというのである[9]．」

14 伊尹伯夷

「三段，四段は，聖の位であるが三段は，たとえば伊尹伯夷のように四段は堯舜のように，そこに区別があるように[1]」

「伊尹（いいん）は殷初の宰相．湯王（とうおう）をたすけて夏の桀王（けつおう）を討ち，海内を平定した．彼のことばに，天命は，常に徳のあるところに下るので，天子たるものは徳を治め，祖先の法に従うことによってのみ，その位を保ちうるといった．（松代尚江 p3）

伯夷（はくい）1100ＢＣ頃の人，伯夷の父は伯夷の弟の叔斉（しゅくせい）を後継ぎにたてたいと願った．父の死後叔斉は位を兄に譲ろうとしたが，亡父の遺志を知る伯夷は弟に位を譲って亡命した．叔斉も兄をさしおいて位につくのを避けて国外に去った．孝実践者の兄，兄の有徳を認めた弟，両人の譲国は，客観的には，父の恣意（しい）を露わにする矛盾を内包しつつ，才徳尊重か長幼重視かの問題も提起する[5]．」

15 乾，坤などについて（下巻）

「易には太極がある．太極が陰陽の両儀を生じ，両儀はさらに四象（太陽・少陽・太陰・少陰）を生じ，四象は，八卦（乾(けん)・兌(だ)・離(り)・震(しん)・巽(そん)・坎(かん)・艮(ごん)・坤(こん)）を生ずる[13]．」とある．

「矢（乾☰）と地（坤☷）は，上下に位を定め，山（艮☶）と沢（兌☱）は気を通じあい，……邵雍（康節）は八卦の方位について「乾は南，坤は北，離は東，坎は西，震は東北，兌は東南，巽は西南，艮は西北である」[13]と述べている．

「易の八卦というのは，☰☱☲☳☴☵☶☷の八つの記号であり，上から乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤と名づけられている．要するに　（陰）と　（陽）の二つの記号を組み合わせて，森羅万象の姿を象徴的に表わしたものである．もともとは，占いに用いられていたが，後世になると自然界の哲理を表わすものとして哲学的な意味が付与されてきた[11]．」

16 忠孝

当流の本体に「二字」という語を譬喩として無念無想を述べている．これは忠と孝の二つの文字のことである．

忠孝について，当流は次のように述べている．「人は父母から生まれ，君主に養ない育てられ，この身を保っているもので，この恩は天よりも高く，地よりも厚い．だからこれに仕える誠の心は自然に出てくるものである[13]」．

浜口富士雄氏の解説を引用させていただき理解を深めたいと思う．

「儒学における実践上の二大徳目．孝は，子の親に対する規範．家族主義に基づく宗法制（家族を規制する秩序体系・筆者注）を背景とする儒学思想の根本となる徳目で，具体的には親の生時には，敬愛と扶養とを尽くし，死後には喪祭をあつくすることである．忠は本来，まこと・まごころという一般的規範であったが，戦国時代後期に臣下の君上に対する忠誠となった．これは宗法的な世襲による君臣関係が崩れ，さまざまな才能による禄仕の君臣関係に移行する過程で，職務に対する忠実さという規範から，しだいに職務の根源である主君への忠誠へと転じていったものである．さらに，私的な家族秩序と公的な国家社会秩序とは連結するとみる儒学の基本立場から，相対的君臣関係の強化のために，血縁による絶対的な親子関係への擬制化がなされ，「忠臣孝子」（『荀子』）と並称されるようになった．以後，忠孝に中国の封建社会を公私一貫して支配する道徳学理となった[5]」．

引用文献

1 久保紀之英，村山輝志訳注『示現流聞書喫緊録上・中・下巻』鹿屋体育大学，1995

上巻　p18,23,27,29,31,33,46-47,48,49,50,51,76,79,86

中巻　p17,18,35,40,46,48,54-55,63,64,70,71

下巻　p15,34,44,53,60,71,82

2 赤塚忠『大学・中庸』新釈漢文大系，明治書院1992，p199-200,199-205,204,205,151,153-154
3 村山輝志『示現流』鹿児島文庫，春苑堂出版，1995，p120-144.
4 下中邦彦『哲学辞典』平凡社，1985，p288,730
5 日原利国『中国思想辞典』研文出版，1984，p12,29,75,110,167,197,255,283,295,296
6 新村出『広辞苑』第四版，岩波書店1993，p1319
7 林大幹『天と地と人・孔子』立花書房1991，p202
8 久須本文雄『日本中世禅学林の儒学』山喜房仏書林1994，P267-269
9 和田武司，市川宏『中国の故事名言・中国の思想別巻』p34,167,274,291,212-213,346
10 西善一郎，小糸夏次郎訳註『太極図説・通書，西銘』岩波書店，p81
11 佐藤仁『朱子』中国の人と思想，集英社，1985，p13,14,49,180-183,191-199
12 市川安司『近思録』新釈漢文大系第37巻，明治書院1991，p17
13 中村璋八『周易本義』中国古典新書続編1992，明徳出版社，p27